

シンポジウム報告

スポーツ史学会第29回大会シンポジウム報告

Reports presented at the Symposium
of the 29th Annual Meeting of Japan Society of Sport History

スポーツ史・体育史研究における地方・地域

——何を語るのか、その課題と展望——

Regions in Sport History and the History of Physical Education
looking from the past towards the future

開催日時：2015年12月5日（土）16：00～18：00

開催場所：群馬大学荒牧キャンパス 教養教育棟GC301教室

司会：福地 豊樹（群馬大学）

シンポジスト：大久保英哲（金沢星稷大学）

竹谷 和之（神戸市外国語大学）

板橋 春夫（新潟県立博物館）

*シンポジウムの再録にあたって

今回のシンポジウムの再録に関して、大会終了後にシンポジストの先生方にご相談いたしました結果、従来この学会が行ってまいりました当日の記録起こしとは別の方法をとということになりました。シンポジウムの臨場感をもって、その内容をお伝えすることと異なり、各シンポジストの本意を正確に伝えることに主眼を置きました。したがって、当日、伝えきれなかったことがらも、十分吟味されたものとして再現されていると思います。また、当日、若干の質疑が行われましたが、紙面の都合上、省略させていただきました。

〈趣旨説明〉

福地 豊樹 (FUKUCHI Toyoki)

「これまで、地方体育史の総括的研究は、県や市などの教育委員会や体育協会などが中心になって編集されてきた。1951年の新潟県体育史をはじめ、年代順にいうと、秋田県体協30年・・・などが出版されたが、それは精粗まちまちであった。

・・・これまでの中央依存の平板な制度史的研究から、中央とのダイナミックな緊張をもって形成される地方史研究の把握へと、その視点の置き方がちがってきた。それは、地方史研究者の問題意識と決して無関係ではない。」(岸野雄三「体育史」大修館書店1973)

岸野氏がこのように言及した時から、すでに40年以上が経過した。

スポーツ史や体育史研究の対象と領域は様々であり、時代や地域、対象、明らかにしたい課題も研究方法さえも異なっている。スポーツ史学会の29回にわたる研究発表を概観しただけでも、その広がりや明らかな点である。そのような状況の中、今回のシンポジウムは、地方・地域に焦点をあてた。

理由のひとつは、全くの個人的な体験からである。ふたつには、スポーツや体育を考えようとした時に、広がりつつある研究対象や問題意識が、見落としてしまっているものはないのかを考えたいと思ったからである。

まず、ひとつ目の理由について触れたい。

少ない経験だが、以前、スポーツ団体や個人の記念史編纂に関わったことがあった。関係する資料の蒐集は非常に困難であり、まとまった資料の集約がなされておらず、残された資料といえば、競技大会のパンフレット類と得点や順位を中心とした大会記録がすべてであった。できあがった「〇〇県〇〇史」、「スポーツ〇十年史」は、分厚いものだが、内容はまさに精粗まちまちの記述と言えるものであった。スポーツの進展、特に地方にある競技団体の歩みを跡付けようとする際に、

役職にいた人たち、選手、記録や成績が主な事柄であり、せいぜい思い出の座談会の収録が精一杯であった。そこには、その競技団体に関わった人たちが何を考え、何を志向していたのか、編纂で明らかにしたい内容の全体像に関して、少しの議論もないままに進行していた。恐らく、そうしたことは例外ではなく、それぞれの県や地方で起きていることと推測できる。なぜそのような状況が生み出されてしまったのか。問題は、たくさんあると考えられるが、関係する人びとの「体育」や「スポーツ」の理解といったことがら、その根底に関わっているように思われる。

一方で、歴史研究領域における地方史や地域史には、たくさんの地方史研究会や地域史研究会が存在する。それらは、地方史や地域史の編纂事業が契機となり、多くの地域で研究の推進があったことが分かる。様々な領域の歴史史料(資料)の消失や散在を防ぐべく、研究者や行政に関わるひとたちが積極的な活動を展開しており、膨大な量の歴史史料の蓄積があり、県や市単位の文書館の成り立ちも実現している。特に地方にあっては、行政文書のみならず、個人が所有する文書類まで、丁寧に発掘・蒐集されている。もちろん、大がかりな編纂事業では、通史や時代区分毎の記述が目指され、裏付けとなる一次史料群が多数複製・再現されている。

ふたつ目に関連しては、私は具体的に論じることが困難である。見落としてしまっていると、そのように感じてはいるが、実際に何が問題なのか、確信が持てないでいる。漠とした近代スポーツの行方か、身近にある身体にまつわることかなのか、いずれでもあり、その他の要件のようにも思える。そして、見落としてしまいそうなことがらを「地方」や「地域」という視座から、しっかりと見届けることが出来るのかも明らかではない。

これまでの体育史研究やスポーツ史研究を概観・総括することは、難しく、すぐに出来そうもないが、研究の対象や領域が異なった様々な研究にも、地方や地域の視点が確実に存在していたことは分かる。「見落としてしまっているもの」が何であるのか、はたまた、そのような問いの立て方自体が有効なのか、考えねばならないと思う。

スポーツや体育が欧米を中心に展開されてきたことを考えれば、私たちの研究が海外に目を向けたり、グローバルな方向へと展開されてゆくことは不思議なことではない。そのような状況であるからこそ、人びとの日々の暮らしの中にある「体育」や「スポーツ」への豊かな理解が、どのように達成されるのか、もう少し、自分たちの足もとを見つめることによって、考えることができないものかと思う。薄っぺらな中味の記録集が、記録集が意味がないということではないが、体育史やスポーツ史として語られ、体育活動やスポーツ活動も過剰な競争原理の中に放り込まれ、何ものかの道具となりつつあるような状況は好ましいものとは言えない。

今、「体育」や「スポーツ」を考える起点として「地方」や「地域」を語ることの意義は、ふるくさい議論ではないはずである。